

小林陸一郎 (1938- / 彫刻家)

2018年12月6日(水) 小林陸一郎アトリエ

—こちらはアトリエで、日頃は箕面のお宅にお住まいなんですね。

そう、箕面へ変わって、細々と作品作りをしようかなと思って。

—1938年のお生まれですね。先生がお生まれになった頃のお話、ご家庭の環境などをお伺いできますか？

父親が小林武夫っていう油絵描く、絵描きですので。母親と結婚して。僕が生まれたのは彦根市なんですね。父親は西宮出身でしてね。僕を産んでしばらくしてから母親と父親は東京へ。父親は絵の勉強と称して、一緒に2人で東京へ行って、東京住まいをしたから。ばあさんのところで、叔父叔母がいましたんでね。叔父がちょうどその時、中学生くらいです。旧制中学。母親と18か何か離れていたから。昔はそんなの多かったですよ。母親は8人きょうだいで。2番目の人が早く亡くなったんでずっと7人きょうだいで。母親が長女でした。4人目にやっと長男が生まれて。その長男は戦争にとられてシベリアに抑留されて。終戦後わりと早めに帰ってこられて。ばあさんが毎日彦根城に願掛けに行っって。石を願掛けでね。今日は高くあがったから早く帰ってこられる、とかね。色々言うて。[終戦の]翌年の8月帰ってきて。

—ご両親が東京に行ってしまったのは何歳くらいの頃ですか？

何歳かなあ。4つか5つの時に、ばあさんに「あんたらとりあえず陸を連れて、西宮なら西宮でちゃんとした家に住みなさい」と。戦争が厳しくなってきたね。だから[昭和]19年かな。終戦の前の年に西宮の東町に今でいうニコイチの家に移越して。そこで幼稚園に入れたんです。幼稚園に入ってまた彦根に。今度は戦争が厳しくなって疎開して。幼稚園転園ですわ。そこから転々が始まって、1年生が終戦の年。彦根にはその年の暮れまでいたのかな。今度は京都へ転校です。それは父親の内職の関係でね。行ってくれる人がいて、京都へ変わって。ガラスにローンテックスで絵を描いてブローチとかね。竹の本に挟むやつにちょっと絵を描いたりとかね。そんな内職を色々していたね、内職家さんですわ。

—お父さんが仕事をしていらしたのは覚えておられますか？

内職ですか？うん、そうですね。

—終戦は彦根で迎えられた？

彦根で。両親は西宮にいましたからね。西宮で区長をしようとしたんです、親父が。他の人は皆戦争に取られていたから。絵描きでいわゆる軍需工場に勤めとって、ポスター描きやらなにやらしていたあれで、戦争に行かなくて良かったんです。とどまっていたから地区の区長をやらされて。最後まで空襲で焼夷弾が落ちて、「お前らー！」て回っているうちに、自分とこの近所に

焼夷弾が落ちてね。おふくろと布団を被って、上を見ながら「今度はあっちや！」とかね。海まで近かったんですけどね、川西の工場のすぐ近くですわ、昔。西宮東町っていったら。岸壁で魚釣りとかすぐに出来たところです。船で香栢園に逃げようとした人が船に直撃弾を受けて死んだりね。布団被って逃げまどったから助かった、って。身ぐるみ置いて彦根に帰ってきたんですね。

母親は工場、ブドウ糖を作る会社でアルバイトで勤めとったからね。時々それを彦根に送ってくれて。ばあさんがそれを溶かして飴を作ってくれたり。それとボラを焼いたのを送ってくれたりね。彦根はそういうもんがなかった。彦根も軍需工場があったんですよ。子供の頃ずっと、はじめコルセアといってね、羽根がこういう具合に付いている戦闘機がよう来ましたわ。関西圏はよう来るんですわ。彦根までね。ということはもうそらぼろぼろに負けている頃でしょ。グラマン F6F というのはね、一番むこうで優秀な戦闘機やったんです、あの当時。零戦より強かったらしいけど。それが彦根に飛んできて。叔父の同級生は空爆をうけてね、機銃掃射で何人かやられた。そういう状況やったですね、終戦前後。

—終戦が1年生で…

京都行ったのは2年生ですからね。転校すると言葉が違うでしょう。京都弁で「お前～するのんか？」って聞かれて、彦根弁で「せん」と言うところが。京都弁で「しいひん」と言うわけ。せやから、「ん、なんやお前は？」って馬鹿にされてね。「せえへん」て言ってやっ通じてね（笑）。

—京都はどのあたりですか？

壬生のお寺のちょっと西寄りやったからね。福知山線が通っているすぐそばの貧乏長屋。となりは朝鮮人で、その隣が日本人で、またその隣が朝鮮人というような。朝鮮人と日本人が交互に入っている長屋でしたね。隣のおうちは火曜の晩くらいに闇屋の会議をやってはって。帰ってきたら闇のあれ [品] をもらったりね。3軒ほど隣のところがスーラって僕よりちょっと年上の朝鮮人の男の子がいてね。そこへ行くとおやつに、なすびかきゅうり。生のなすびかきゅうりをそのまま、まるごと一個ぼんと。健康的でしょ（笑）。

ビー玉僕割に上手で。ほんでこんなカンカンに貯めていて。スーラと一緒にこのくらいの五寸釘を拾って。「今度は客車やからあかんけど次は貨物やからいこか」って言ってね。線路に並べて。そんなもん今やったらとんでもないことですよ。轆いててくれてね。大抵飛ばされんねんけどね。客車の方が軽いからようけ飛んでしまうわけ。貨物は重いからちゃんと轆いてくれるやつが多い。砥石で研いでナイフみたいにして。今やったらカーって怒られるけどね。客車と貨物が交互に行っていたからね、時間帯が。客車が行った後、今度は貨物やから。その時間で行ったら。

秋になったらイナゴ取りね。木綿の袋にイナゴをとって、持って帰ってきてしばらく置いておくと糞するでしょう。後はフライパンで炒るわけ。彦根のばあさんがそうやってやったらポ

ンポンポン音がして。イナゴ炒って粉にしてそれをご飯にかけて食べる。美味しかった。それを食べ過ぎて僕のおしっこが真っ白になってびっくりして。たんぱくの取りすぎ。だからみんな栄養失調でね。転けたらすぐ化膿するしね。

—京都にはどのくらいまでいらっしゃったんですか？

京都は1年足らずやったと思いますよ。それですぐに伊丹。伊丹の三菱の人に絵を指導するというので、父親が三菱の寮に入れてもらえることになって。今はどうなったか知らんけど、猪名川からちょっと歩いていくと三菱の寮があったんです。母親は俳句の会をしたりして。そこに結構6年生位までいたんですよ。

—お父様がその頃は絵を三菱で教えられていたと。

そういう条件で寮に入っていて。でもいっぺんそこで僕らの寮の向かいの寮が火事出してね。防火壁で止まって。うちは助かったというようなこともありましたけど。

—絵を教えるというのはどのような？

三菱の会社の人に絵画指導ですね。美術クラブがあって、三菱の。

—それでお父様が雇われるという。今ではちょっと考えにくいですね。

そうやね。あの辺はね、みんな農業してはる人が多かって。その人の職業が大抵三菱の工場ね。塚口に三菱の工場がありましたからね。森永と三菱と。三菱の工場へみんな勤めに行ってはる人ばかり。で、農業もやってはるというような感じ。

—農業して三菱で働いて絵も習っているという。夜とかになるんでしょうか。

そうそう。夜ね。

—会社がそういう場所も先生も提供していたということですね。

そうそう。三菱って裕福やってんね。寮いうても12畳の1間だけやったけどね。

—会社がそういう先生を雇えたというのがすごいですね。

美術クラブが雇ってくれと会社に言ってしてくれたんか、詳しいことは知らないですけどね。三菱もなんぼか出したのかわからんし。クラブの人がお金出してやっているということもあるだろうし。どっちにしても今では考えにくいね。

—その頃からお父様が絵を描いているのをご覧になって一緒に描いたりされていたんですか？

そらそうやね。それもあつたけれども。ちょっと普通の子と感じが違うからね。お絵かきの子という感じで。

—先生はご長男ですか。

長男。その時はまだ一人っ子やって。12年後に弟が生まれて。一回り違い。僕が虎で弟も虎。

—物心がつくまでは一人っ子だったんですね。

そうそう。

—当時で男の子1人だったらものすごく大事にされるんじゃないですか。

うーん。大事にされたんかどうかは、それはようわからんのやけどね。進駐軍が当然来ていたわけやからね。父親が絵を描いているから。進駐軍で来た将校を、父親が行動美術[協会]（「行動」）に出していたから展覧会に連れて行ったりして。家に遊びに来たり、そういうこともあってね。その時初めて進駐軍の将校がコカ・コーラを持ってきてくれてね。はじめてコカ・コーラを飲んで、うまいもんやなあって。

—そもそも当時炭酸はあったんですか？

ありますよ、ラムネがあるからね。

—お父様が「行動」にいらしていたということもあって、先生も？

それはね、父親とは関係なしに。[学生の時に]美大の同級生とみんなで展覧会を見て回って、どこが良さそうかなあ言うて。公募展は大体見たんですけどね。そうするとね、どうも「行動」がいちばんね。建畠覚造[彫刻家、1919-2006]さんと向井良吉[彫刻家、1918-2010]さんとね、若手の俊才がいたから。その2人に引っ張られて、ものすごく現代的だったんで「行動」がいちばん面白そうやなど。で、「行動」に出してんね。父親がいたということも多少関係するかもわかりませんがね。建畠、向井、面白いなあって。大阪に今村輝久[彫刻家、1918-2004]がいて。森口宏一[彫刻家、1930-2011]さんとか。「絵あんまりおもしろいからなあ。ちょっと彫刻の方入れてえな」とかね。彫刻の会合で一緒に飲んだりとかはありましたね（笑）。アトリエも遊びに行ったりね。絵描いてはるのね。抽象画やからね。キューピーさんシリーズをやり始めてからね飛躍的にワーと変わって行かはったね。井原康雄[美術家、1932-2010]さんがお友達でいたからね。

—お父様は先生がいつごろから「行動」に？先生が物心ついた時からですか？

そうそう。いちばん最初は二科やって。みんな大体二科。戦中はずっと二科と院展、それから日展。それくらいしかなかったわけよ。戦後になって二科にいた人が今度は新しく古谷新[洋画家、1897-1977]さんとか小出卓二[洋画家、1903-1978]さんとか、関西ではこの2人かな。向井潤吉[洋画家、1901-1995]さんとかあの辺7人ほどが集まって「行動」を立ち上げた時

に、父親も「行動」に出すようになった。だから「行動」の初代の次の会員に入れさしてもらったみたいやね。

—先生は大学では彫刻科に進まれたわけですが、お父様は絵をされていて。彫刻に進まれるきっかけというのは何だったんでしょうか。

父親は絵描きでしょ。あんなもんわざわざ大学に行って描かんでもできるわ、というよな。親父は大学も学校もどこにも行っていなくて、中之島の研究所[中之島洋画研究所]育ちから。そんなんで彫刻はちょっと勉強しにいかんとどうにもならんやろ、と。彫刻の方がおもしろそうやなあと思って。で、彫刻受けたんですわ。何も他のこと考えんと行って。ほんまにおぼこかったんですねえ。何にも考えとらへんなあって思って。

—先生が大学で授業をとっていらしたときは、辻晋堂[彫刻家、1910-1981]さんや堀内正和[彫刻家、1911-2001]さんの授業も取っていらしたんですか？

もちろんそうです。

—先日宮永理吉[東山]先生にインタビューしましたが、少し宮永先生が年上になりますね。

僕が1年の時に4年生だった。井上平八郎[彫刻家、1935-]とかね。

—八木一夫[陶芸家、1918-1979]さんも、もう先生ですか？

非常勤でね、彫刻の。またすごい人がいてたわけ。[木村]重信[美術史家、1925-2017]さんもまだ若くて。梅原猛[哲学者、1925-2019]さんは大分あと。八木一夫さん、堀内さん、辻さん。錚々たる人がいたんですよ。

彫刻の助手に上田弘明[彫刻家、1928-1979]さんというのが。小豆島で僕が企画した彫刻のシンポジウムの時には来てくれて、色々話してくれはったんやけどね。石の先生やったかな。

堀内さんには1年生の時に基礎のあれ[授業]で[教わって]。針金を使って触角ばかりのつくれ、とかね。そういうのをずっとやりましたね。溶接は溶接で溶接会社のあれ…どこやったかな。どこからか一人来て貰って溶接を習って。それからその頃木彫は辻先生やったかな。

堀内、辻、二巨頭の下に野崎一良[彫刻家、1923-2008]、山本恪二[彫刻家、1915-2000]。

—大学の時の印象に残っている授業はありますか？先日宮永理吉[東山]先生にインタビューをした時にも針金とペンチをいきなり渡されてというお話を聞きました。先生も先ほど仰っていたので。

基礎実習はそういうのばかりですからね。もちろん粘土も使ったんだけど、1年生の時は具象なんていっつもやってませんから。そういう基礎実習。1年の時は具象をやらずに堀内式の授業だったからね。2年になって人体やりましたね。モデルを使って人体。

僕が3年から4年になる時にね、欠席日数が80何回。今信楽にいて陶芸をやっている川崎千

足 [陶芸家、1938-] が同じく 80 何回でね。「君たちは進級できないよ」と言われて。長いことね、名簿が 4 回生にならんと 3 回生のところに名前が並んでいました。僕らね、毎日学校に行てはいるんです。せやけどね、遅刻するんですわ。朝寝坊ですわ。上田 [弘明] さんという助手の人に気にして言いに行くどね。「小林そんないちいち気にせんでいいよ」って。もう 1 人の助手の人がね。山崎脩さん。二紀やったけどね。辻先生が院展から二紀に変わりはったからね。どういわけか僕らのクラスみんな二紀に出さんと、「行動」に出していたんですよ。機嫌も悪かったんやと思います (笑)。二紀誰も出しとらへんねん。面白かってんね、「行動」がね。[二紀も] 新しくしようと思って辻さんやら呼んだやけどまあなんかね。それほどでもないなという感じだわ。

—当時の「行動」は最先端の雰囲気だったのでしょうか？

そんな感じやね。で、辻先生は陶彫やってはったんでね。種類が違ったのね、全然。同級の野島二郎 [彫刻家、1938-] が割に陶彫をやっていたわ。で、野島は二科に出してましたね、堀内さんの。中学からの同級生でずっと箕面。塚口から箕面に引っ越したのは小学校 6 年生の頃でしたわ。転入するたびにクラスのボスに喧嘩を売られてね。伊丹の小学校のときにはボスと仲良しになってね。

—1961 年に京都市立美術大学 [現・京都市立芸術大学] 彫刻科を卒業されて、1963 年に行動美術展で奨励賞を受賞されて。

そうですね。1967 年に行動美術賞。その次の年、会員ですわ。行動美術賞もらったら会員に推挙されるから。

—その当時、制作の時にはどんどん新しいアイデアが湧いてくるという感じだったのでしょうか。

どんどんアイデアが湧いてくる…というか、困らなかつた (笑)。煙とか雲とか、67 年に女房とメキシコ旅行したんですよ。メキシコがものすごく面白かって。ピラミッド登ったり、なんやかんやして。飛行機がちょうど雲の上に出るでしょう。雲がわーっとしてその上飛行機が飛んでる。そんなんで雲って面白いなあ、て。雲が大体見て面白くて。

そのうち煙突から煙が出るでしょう。それがものすごく面白いなあ、というようなことだわ。それを具体化して、何とか周辺をぼやかして立体が作れへんかなあと。そんなことが出来るわけないんで (笑)。まあ雲の造形みたいのがずっと続きましたわ。

そのうち何やら、「芸術家は高尚やから」とか友達に言われたりするもんやから。「飯食って、トイレも行って、うんちもするんやから、高尚なもんちゃうわい！」と言って。通俗的ということにもものすごく [こだわって]。通俗をやろうと。通俗ということを考えて行き着いたのが、格子と水玉模様。あそこにもあるような水玉模様のね、その下にある格子ね。あれをずっとやり始めて。通俗に徹してやろうと。そんな高尚なもんちゃうで、と [いう気持ちで] やり



出したんですよ。

—先生は最初から木彫ですか？

いや最初はセメント彫刻。玄関にあるでしょう。あれは「行動」の全関西美術展〔全関西行動美術展〕で全関賞〔全関西行動美術賞〕もらった作品なんで。お金がないんでね、セメントで。セメントがいちばん安かったんです、材料として。粘土で原型を作ってね、石膏で型取りして。これは今村〔輝久〕先生のへその緒で《I氏のへその緒》という作品。

—今村先生とは親しかったんですか？やっぱり「行動」で。

あのね、「行動」だけでも、今村輝久も美大の先生に非常勤で来てはったからね。野崎さんの方が下です、今村さんより。今村さんは最初は「行動」じゃなくて日展に出してはったやね。戦後すぐやめて「行動」に。

野崎さんも今村さんも戦争に行っはるからね。今村さんはもう長いこと中国はわしいかへん、て言うもったね。兵隊の時に向こうの人に色々しんどい思いさしたん思い出すから、もう行かへんて言うてたね。最後の方は行っはったけどね。

—1968年に日本青年彫刻家シンポジウムが小豆島で。この時に集まれたのが…

山口牧生〔彫刻家、1927-2001〕さんと、増田正和〔彫刻家、1931-1992〕さん。この3人で企画を立てたんですね。

—どういう経緯でこれをしようということになったのでしょうか？

前の年にね、僕が信濃橋画廊で個展をしていたんです。夏に女房とメキシコ行くことを決めてましたからね。そうこうしているうちに増田さんが来て。「小林さんも、夏なあ暑いのに家にいても仕事にならんしね。どこか瀬戸内海の島で石の取れるところでね、コンコンやっても家にいても経済的に変わらへんから。そういうところで何かグループでやらへんか？何人かで行ってやらへんか？」言って。「そうやね、1人で行くよりかは楽しかろう」言うて。〔増田さんが〕「じゃ、今度来た人にその話するわ」って。次に来たのが山口さんで（笑）。山口さんのその話をしたら「賛成！」ということで、ほんなら3人で行くところの計画をしようと。僕がメキシコに行ってしまうので、その間に石の産地調べとくわ、ということ。

小豆島の福田に石やっるところがあると。ちょうど古家新さんが小豆島にアトリエを持っはった頃で。古家先生に相談したりしてね。シンポジウムの話は、3人でやるよりいっぺん美術家連盟に声かけてみようか、とか言ってね。どんどん話が膨らんでいってね。山口さんはその頃ヨーロッパのシンポジウムに行かれたりしていたもんですからね。次は沖縄、台湾、とかどんどん広がってね。やろかとか言ってそういう話したんですけどね。で、小豆島のシンポジウムやることになって、あそこにポスターがあるんですけど。全員は集まらなかったけど、名前が載った人はほとんど来て。

—増田さんは絵のご出身やったんですね。

そう、洋画出身。「行動」には彫刻を出してはったからね。その頃ね、山口牧生さんもちょっと「行動」やったし、福岡道雄〔彫刻家、1936-〕さんも「行動」やったんですよ。

—シンポジウムの際に先生方が書かれている言葉で、「開かれたモニュメント」という言葉の意味をお聞かせいただけますか？

要するに台座に乗った、きちっとしたこういうものがモニュメントではありませんよ、と。もっと何というかオープンに人が、モニュメントと思わんと通行したり何かできる、そういう空間の中で存在していていいじゃないですか、という考え方なんですよ。

最初に作った小豆島の八十八ヶ所〔環境造形Q《八十八ヶ所》、1973、小豆島坂出港ターミナル広場〕もね、標高差で決めているんです。あの、いわゆる0メートルのところもあるんですよ。だからプラス15cmでしょうかということ。プラス標高。1番から順番に。寒霞渓はもみじで有名。朱色が映えるところだから、山に向かった一面を朱色に塗りましょう、ということで。

—この場所というのは何か依頼があったんでしょうか。

そうです。シンポジウムの場所というか港湾をあの、内海町〔現・小豆島町〕の坂手港でしょう。改修工事をして広場に何か欲しいという話になって。その時に東京の土谷さん〔土谷武、彫刻家、1926-2004〕のグループと。それもねコンペ〔小豆島坂手港石彫コンペ、1973〕に。港湾施設は神戸大の設計でした。そこへ高橋亨〔美術評論家、1928-〕さんやらが入って。そうしたらコンペにしたら、ということになって。コンペに僕らも参加して。優勝したのが土谷さんのグループで、1位は100万円で設計するという条件が付いていたんですけど。

僕らは2位やったんやけど、計画は大変面白いというのでお金は出えへんけど、実費で制作してくれないかと言うことで。「作れるんやったらおもろいから、やろやろ！」ということで。ほんで行って。ほんまに実費でした。2位は10万円だけですわ。あと、石代とか滞在費は出してくれたんですわ。切ったりほとんど人間の手を使わんでいいようにしてるからね。僕、山口さん、増田さんで。僕はその頃夙川短大に行ってたんかなあ。割に気楽に出て行けたんで。夏休みがあるし、学校の先生はね。山口さんはね、夜間の学校行ってはったからね。しんどかったんちゃうかなあと。山口さんは昼間の時間を使いたかったからね。京大出身やからその気になったらちゃんとした公立の高校に行けんねんけどね。

そこはもう自由に船が入ってくると朱いのがばーっと見えてね。その間通れるように両手に荷物を下げて〔通って〕も当たらないようにとかね。色んなところをね。阪急の改札通るには斜めに通らなあかんからすつと通れるようにとかね、幅を決めるのはそんなきまりでやったんですね。



—制作にはどのくらいかかったのでしょうか。

1カ月位かな。

—アンカーを打つとかは業者がしてくれるんですね。

そう、そんなんは全部業者がしてくれる。

—シンポジウムがきっかけで環境造形Qに。

やっぱり名前がいますでしょう、グループの。どうしようか、言うてね。初めは山口さん、増田さん、小林の名前の頭文字にしようとか、なんか色々言っていたけれども。環境造形。その時、「造形」という言葉、「環境造形」なんていう言葉は全然なかったんです。今建築の方で違う意味で使っていますけれどもね。僕らは環境を造形しましょう、ということで。それだけじゃあれやな。アルファベットで1番変わったやつ使おうかと。ヒゲ生やしてるからあれにしようということでQに。人は「クエスチオンのQですか？」とかね、色々言ってくれるけど。初めはそんなんですわ。アルファベットの中でいちばん変わってるやないか、と。

—「環境」という言葉がぼちぼち出始めた頃ですかね。ちょうど須磨離宮の野外彫刻展〔神戸須磨離宮公園現代彫刻展〕とか。

そうですね。僕は招待で出しているんです〔第1回須磨離宮公園現代彫刻展、1968〕。それがあの外にある雲の作品。その後、何回目かで僕がぼんとグランプリを取っちゃって〔第8回須磨離宮公園現代彫刻展、1982、神戸市長賞（大賞）〕。それはこの間の震災で倒れて壊れてしまって。修復したかったんですけどね。3本に割れてしまったんですわ。それは廃棄処分しました。

増田さんの座布団〔型の作品〕はポートアイランドの北公園にあったんですけど、あそこは地盤がずれてしまってどこかにはまっているはずですわ。海へね。あんなもん勝手に誰かが持つて行くわけないから。なくなっているんです。潜水夫をつかって引き上げるようなことは、あの時神戸市は他のことで大変だったから。そのままですね。

—須磨離宮の展覧会は何回か出していらっしゃるんですね。

第1回、8回、9回の3回〔1968、1982、1984〕ですね。そのうちの2回〔第8回、9回〕賞をもらったかな。

—80年代にたくさんトルコのお仕事が出てきますが、これはどういう経緯なのでしょうか。

大阪府の海外派遣文化交流員という制度があったんですよ。その第2回目に僕が当選して。その時にどこ行こうかと思っていたら、木村〔重信〕先生が色々紹介してくれて。南アもその頃候補にどうや、と言われていたんだけど。あそこはヘイト〔アパートヘイト〕のところやし、ということで。トルコ、僕行きたいと思う、というので。前にメキシコ行ってますんでね。トルコにしたんですけどね。

—海外派遣文化交流委員というのは応募されるようなものなのでしょうか。

そう、公募だったんです。2回でやめてしまったんですけどね、大阪は。お金かかるしね。その頃前田さんが文化担当で課長か何かでいらっしやったから。前田孝一さん。

—最後はひろしま美術館の館長さんなさったと思うんですけど。府の文化部、府の文化関係の部署におられたと思います。とにかく関大の美術部やったと思います。私 [森口まどか] の父 [森口宏一] も関大の美術部やったのかな。大阪の現代美術センター [大阪府立現代美術センター] の館長になられたりして。

—この頃、確かに日本で海外彫刻のシンポジウムが多かったですよね。

そう、まちづくりをしようというようなね。招待作家が来てそこに作ったり。作品が出ていてその場で。作家は作品を作ってその町に置いていく。要するにシンポジウム流行りでね。そうの方が、主催したところが安く手に入るんですね。言うてみれば二百万円そこそこで1点手に入ると考えれば安いですよ。

僕も須磨離宮で大賞もらってあれが200万円ですわ。制作費がなんぼやったかな。ま、要はそんな儲かってへんのですわ。最初に制作補助ということで30万円ほどくれるのでそれでなんとかね。

—いちばん交流が深かったのは、山口さん、増田さんですか？

山口さんが僕より11上。増田さんが8つ上で、僕、若かったんですよ。僕は意外と年上の人と付き合っているんですよ。未だに林康夫 [陶芸家、1928-] さんとかも親しくしています。林さんの奥さんが松田照子さんいうてね、ちょうど [宮永] 理吉ちゃんと同級生ですわ。大阪の研究所 [大阪市立美術研究所] でね。その時は福岡 [道雄] さんとか山口さんとか増田さんもちょっと研究所に関係してたりして。それこそ僕は年上の人、森口宏一さんとか井原康雄さんとかね。井原さんも「行動」にちょっと出してはった。あと「具体」の人も割と親しくて、元永 [定正、美術家、1922-2011] さんもそうですしね。あの人も大分上。津高 [和一、美術家、1911-1995] さんとも親しかったですね。

—先生はイメージとして、大阪というより、京都と神戸ですよ。

そうやねえ、神戸でいちばんたくさん仕事してますからね。《アンドロメダへのメッセージ》 [1978年、神戸市中央区] とかごつひのがありますからね。言うてみたら大阪はそういう文化に関してあかんのですわ。

—先生は「具体」の若い世代との歳が近いですよ。第一世代はぐんと上で。先生が作品を発表されはじめた頃は「具体」はもう終わりかけている頃ですよ。

そうやけど嶋本 [昭三、美術家、1928-2013] さんとか村上 [三郎、美術家、1925-1996] さんなんかね。村上さんとは割に親しくしていたんですけどね。残す仕事じゃなくて行動する仕事みたいな形だったから。残す仕事では松谷 [武判、美術家、1937-] くんが今いちばん残っているやろうと思うけどね。アメリカ行ったヨシダミノル [美術家、1935-2010] とかね。1つか2つ上かな。

—グタイピナコテカにも行っておられましたか？

行っていましたね。最初はピナコテカいう形できちっとしていなくて。あの人 [吉原治良、美術家、1905-1972] の倉庫やったからね。倉庫展みたいな形ではじめやっていたからね。「具体」はね、全部が全部ええとは言わんけれども、イベント的なことをやっていたからね。[当時は] そういうのすごく少なかったんですよ。個人的にきちっとした作家像がありましたからね。そういう点でもあの時代、「具体」だけじゃなくてみんな作家はがんばって仕事していましたからね。

—先生が大学生の頃には、画廊がポツポツでき始めていたんですかね。

そうやね。信濃橋画廊はあったし、あの画廊とか。みんなが溜まってね。迎井夏樹さんね。京都はココ [ギャラリー・ココ] さんも。ココの後に虹 [アールスペース虹]。虹というのはそのだいぶ前にあって。大阪はあの画廊とか荒木 [高子、陶芸家、1921-2004] さんがやっていた白鳳画廊とか。その筋向かいに梅田画廊。高橋亨さんなんかぐるっと回ってはったからね。

野尻弘 [洋画家、1922-] さんとかね。奥さんが料理家でね。十三にもうひとり河端さんという人がいたでしょう河端亮治。三島喜美代 [美術家、1932-] の旦那さん [三島茂司、彫刻家、1920-1985] も一緒によたむろしてたね。河端さんというのは自転車で画廊回ってたからね。十三からやってきて。自転車屋さんやったから。

—現在の制作のお話をお伺いできますか。こちらで制作を？毎日箕面からこちらへいらっしゃるのですか？

そうそう。泊まりこんでずっとやっていたんですけどね。大きな仕事はだんだんしなくなつたし、作品が売れるわけでなし。ぼちぼちやるんやったら箕面とこっちと両方で晩飯作らなあかんのも大変やということで、「僕もう通うわ」というて。車やったらわりに往復楽になったんで。トンネル使えば楽ですし。今はほとんど泊まらずに。冬場寒うて難儀ですわ。ここね、いちばんきつい時は凍結深度 30cm くらいになるんです。雪は少ないんですけど、寒うていてられないです。こっちに来てアトリエで仕事しようと思ったらストーブつけてね、ようやくぬくもったないうたら夕方ですわ。せやからもうそんなんでね。木のこういう仕事になったんでね、まあぼちぼちやれば彫る仕事じゃなくなつたんでね。板の貼り合わせの仕事に変わっちゃつたんで。

—作られる前というのは形のイメージを描かれるんですか？

はい、スケッチします。色も大体固めてかかりますけど。木地を見ていてそれで決めることも多いですね、色は。初めからあそこはオレンジで、ここはブルーで、という風には決めていないです。板の貼った感じで、こうやったろか、とかね。大体スケッチは最初にしますね。

—昔から制作される時には最初にスケッチをされると。大学で教えられた頃からですか？

そうですね。スケッチは最初にしますね。ずっとね。スケッチブックにずっとイメージが湧いたらちょこちょこ描いて。

—最後に、今後の展開についてお聞かせいただけますか？

そうですね、植物は地下ですごいことしてる。樹々や青葉、花で昆虫を生かしている。そんなのを見ていると、新鮮で新しい感動をおぼえます。もう大きな作品は作りませんから、小さくとも大きな感動を伝えられたらと思っています。素材は木とアクリル絵具が中心になると思います。

\*文中、[ ]内は補足。

聞き手： 國井 綾（大阪中之島美術館準備室学芸員）

森口まどか（美術評論家）